
オレが女の子！？

島田海斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オレが女の子!?

【Nコード】

N7042Z

【作者名】

島田海斗

【あらすじ】

オレ（宮島瑞樹）は中学最後の春休み、友達とドライブに行った。もちろん15歳だから免許は無い。オレは調子に乗ってスピードを出してカーブを曲がろうとしたが、曲がれるはずも無く崖から落下。オレは気がつくとも病院の1室にいた。

チン が無い!?

オレの男としての人生は15年という短い期間で終わってしまった。

何故オレはあの日、不良ぶって車の運転なんてしたのか。今となつては分からないが、今でも後悔しているのは確かだ。

3月5日 午後4時35分 晴れ。

オレ(宮島瑞樹)は友達(竹下)と車で峠をドライブしていた。

「暗くなってきたな。そろそろ帰るか?」

「お前無免許なのによく運転できるよな。しかもMT」

そうオレは無免許運転をしている。それもそのはず、だってこの前中学を卒業したばかりだから。
車は親のを無断に借りてきた。

「こんなの余裕だよ。ゲームと一緒にだし」

「まあ、ここ夜は走り屋が来るから早く帰ろっぜ」

「まあそうだな。帰るか」

オレは車のスピードを速くして峠を下っていった。車を運転しているときは直線を飛ばすより、カーブをギリギリのスピード曲がるときのほうが面白い。

オレはギリギリ曲がれそうな位までスピードを出した。

「おい、おい！！何スピード出してるんだよ！！」

「大丈夫だってビビるなよ」

そしてカーブ直前で思いっきりブレーキを踏み、ハンドルを回した。車はもちろん制御しきれずに崖下に落下。

- - - - -

次に目を覚ますと白い天井が見え、そして病院独特の臭いがしてすぐに病院だとわかった。

周りを見ると知らない婆さんや爺さんばかりで竹下の姿がない。

その時ガラガラと若そうな夫婦が入ってきた。そしてオレのベッドの横にあったイスに腰をかけた。

「どう具合のほうは大丈夫？」

・・・誰？オレの横にいてオレに話しかけてくるなんて、俺の知り合いしかいないけど誰だか思い出せない。親戚だっけ？

その夫婦の妻のほうの話しかけてきた。

「まだ、あんまり良くないみたいね。まあゆっくり直しなさい」

そういつてにつこりと笑った。見ていると何か癒されるような人だ。

次は夫のほうの話しかけてきた。

「そうだぞ。まだ春休みはあるし、高校入学まで似間に合わせればいいんだからな」

夫のほうはメガネをかけていて、こちらはサ エさんのマ オさんに似ている。

オレは良く分からないが適当に頷いておく事にした。

「それじゃあまた来るわね」

そう言つて二人とも出て行つてしまった。

誰だっけ？ 思い出せない。

とりあえずオシッコをしたいのでトイレに行くことにした。
意外とトイレまでの道のりは長かった。

男子トイレに入ってオシッコをしようとアレを出そうとしたら・・・
・・・無い!?

「オレのチン がねえ!!」

大声でそんな事を言つと看護師が入つてきた。

「ど、どうしたんですか？」

オレは涙目で言つた。

「オレのチン が無いんです」

看護師は、はあ？って感じの顔をしていた。

「何言ってるんですか？ついてるわけ無いじゃないですか」

え？もしかして事故で無くなったの！？

「だってあなた女の子ですよ」

「はあ？オレは男ですよ？」

「・・・・・・・・・・？」

オレはちょうど看護師の後ろにある鏡を見た。

するとそこには茶髪の肩位まで髪を伸ばした女の子が写っていた。

俺が右手を上げると鏡の中の子は左手を上げた。両手を上げるとその子も両手を上げた。

・・・・・・・・これは・・・・・・・・オレ!？

え？何で？

「とりあえずここでは迷惑ですし、トイレなら女子トイレに行ってください」

そう言われてオレは隣の女子トイレに入れられた。

女子トイレにはもちろん個室しかなかった。

オレは個室に入ってもう一度股間を見た。
何度見てもないものはなかった。それにさっきまで気にしてなかったが、良く見ると胸も少しある。

誰の体だ？何でオレは女になってる？俺の体は？

しばらくトイレの便器の上に座って今までのことを整理した。

つまりさっき来た夫婦はオレの両親！？

じゃあオレの元の両親は？

そして竹下はどうなった？あいつもまさか女に！？

結局整理できず疑問ばかりで良く分からないまま部屋に戻ることにした。

部屋に帰るときに病院全体を見ておきたいと思って、少し遠回りした。

その時オレの横をオレと竹下の体がストレッチャーに乗せられて通り過ぎていった。

「早くこのままだと死んじゃう」

看護師がそんな事を言いながらストレッチャーを運んでいった。

オレは、しばらくその光景を見ることしか出来なかった。

オレが死んだ!?

オレと竹下が運ばれた?

しばらくしてオレは、そのストレッチャーを追いかけていった。

もうすでに見えなかったが、あんなだけ急いでいたら、行く場所は救急の手術室だろう。多分……

救急の手術室前に行くと竹下の両親とオレの両親がいた。

手術室のランプは消えていた。手術はどうなった?

まあさつき運ばれてもう手術が終わっていると言っことはつまり……

お袋がボソツと呟いた。

「何でこんなことに……」

竹下の母親がその言葉にキレた。

「あなたの息子がうちの子を誘ったから……だからうちの子は死んだ!……!」

その顔は悲しみと怒り両方を表していた。

「やめろ!!今更、宮島さんを責めたところで何の意味もないだろ」

お袋と親父は土下座をして謝った。

「すいません。すいません」

やっぱりオレも竹下も死んでしまったらしい。
しばらくボーツと立っていると竹下の母が突っ込んできた。

「誰あなた？」

「え？あ、あの〜」

思わずオレは言葉に詰まってしまった。

「死んだ親族の泣く姿見て面白いの？」

「いや、そんなつもりじゃ・・・」

「あっち行つてよ！！！！！」

訳も分からずオレはそこから追い出されてしまった。

俺の体は確かにストレッチャーの上に乗っていた。そして、あの時は生きていた。

じゃあ、ここにいるオレは一体誰なんだ？

訳が分からなくなってきた。まあ最初から分からないけど・・・

足が疲れた。ひとまずベットに戻って考えよう。

- - -
- - -
- - -

ベットに戻ると近くに手鏡が置いてあったので、座って自分の顔を見てみた。

しかし鏡に写る顔は、知らない少女の顔。

オレはこの顔でこの体でこれから生きていかないと駄目なのかな。そうだったら、もう二度とオレの両親や竹下の両親とも会わないかもしれない。

確かに女になってみたい気持ちはあった。でも別に生涯女としてすごして生きたいわけではない。別に1時間だけでよかった。一生、女として過ごして行くとなると気持ちはブルーになる。

ベットに横たわるといきなり睡魔が襲ってきた。オレはそのまま重いまぶたを閉じて寝ることにした。

- - -
- - -
- - -
- - -

次の日、目を覚ますとまたこの体の母親がいた。

「おはよう美月」

どうやら美月と言う名前らしい。オレと一緒に名前じゃん。

「アンタ誰だ？」

「そう、まだ記憶が戻らないのね。っていうか何か別人みたいになったわね。あなたの名前は日向美月。私の子供よ。そして来年から高校生」

別人見たいって、心は別人ですからね。あなたの娘と違うからね。

「あなたは交通事故にあつて今入院しているの。それは覚えている？」

交通事故にあつて入院？それまでは普通に生きていたということか。じゃあこの体の持ち主はどこへ？

「覚えてない」

「そう、まあ今日の午後で退院だから家に帰ってゆっくり記憶を戻しましょう」

「……………うん」

まあ実際、記憶は絶対に戻らないんだけどな。

そこからは頭の検査をしたり、自分の寝ていたベット片付けたりしているのと忙しかった。

帰る前にオレに最初の難問が来た。

「ああ、そういえば。その病院服じゃ帰れないわね。じゃあ着替えましょう」

母親はさつきバックの中に片付けた私服を取り出した。その服はいかにも女が着そうな服でキラキラでふわふわな感じがした。

オレはそんな服にかなり抵抗感があった。

「こんな服しかないのかよ」

「そうね。こんな服しかなかったと思うわ」

しかたなくその服を着ることにした。今着ている病院服を脱ぐとやっぱり女だからブラジャーもしていたしパンツも女性用だった。

自分が女性用の下着をはいているなんて、と考えたら顔が真っ赤になってきた。

急いでスカートを履くとズボンと違って下が開いているから、誰か下から覗き込んでる感じがして、かなり恥ずかしい。そして足がスーする。とにかく変な感じがする。

「さあ、受付に挨拶して帰りましょう」

オレと母親は受付に挨拶をして、病院の前に止まっていたタクシーに乗り込んだ。

荷物は、運転手の人がトランクに入れてくれた。

オレの第二の人生が始まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7042z/>

オレが女の子！？

2012年1月4日09時50分発行